NGO・NPOの環境保全活動を支援します。

環境再生保全機構

地球環境基金便り

No.35
September 2013

地球環境基金便り
第35号　2013年9月1日発行
発行／独立行政法人 環境再生保全機構　地球環境基金部　基金管理課　URL：http://www.erca.go.jp/jfge/　E-mail：c-kikin@erca.go.jp
〒212-8554　神奈川県川崎市幸区大宮町1310番　ミューザ川崎セントラルタワー8F　TEL：044(520)9606　FAX：044(520)2190
編集協力／廣告社株式会社

ここでも地球環境基金への募金が…

第22回 ばらサミット in いわみざわ

バラを「市町村の花」として制定したり、バラが広く住民に愛好されている地方自治体が、年に1回開催している「ばら制定都市会議（ばらサミット）」。第22回は北海道岩見沢市のいわみざわ公園で7月11～12日に開催されましたが、この会場に地球環境基金の募金箱が設置されました。

募金された方にいちご大福をプレゼント

募金箱が設置されたのは、いわみざわ公園の「レストハウス・ハマナスの丘」内にあるショップ「工房こぶし・いこい」の店頭。11日は100個、12日は80個のいちご大福が用意され、地球環境基金に募金をされた方に数量限定でプレゼントされました。

雪氷熱利用システムで栽培されたイチゴを使用

当日プレゼントされたいちご大福は市内のカワダ製菓がつくったもので、中に入っているイチゴは雪氷熱利用システムで栽培された“雪ん娘”が使われています。道内有数の豪雪地帯である岩見沢市は雪氷熱利用に積極的に取り組んでおり、品質の高い夏イチゴの栽培にもその技術が活かされています。おいしくて、しかも環境にやさしいハウスで育ったイチゴのお菓子は、募金のお礼にぴったりのプレゼントになりました。

ご寄付のお願い

地球環境基金への寄付を通して、環境NGO・NPO活動をご支援ください。

本de寄付
不要になったCD、DVD、ゲームソフトを集めてブックオフへ。

スマイルエコプログラム（エコとリサイクルをお手伝い）
宅配便買取にエコ募金を組み合わせたエコとリサイクルをお手伝い。

CREDIT CARD
VISA、Masterカードをお持ちの方はオンラインで。

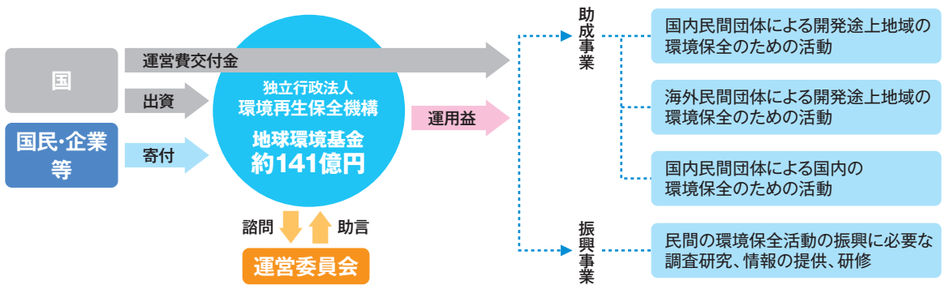
全国のファミリーマートに設置されているFamiポートから。

金融機関からの寄付
お近くの郵便局または金融機関からの振り込み
ゆうちょ銀行
口座名義：地球環境基金
口座番号：00190-0-664214

ご寄付の方法は様々です。詳しくは、ホームページをご参照ください。 http://www.erca.go.jp/jfge/

地球環境基金とは

環境再生保全機構は、国の出資金と民間からの寄付金により「地球環境基金」を設け、その運用益と国からの運営費交付金により、国内外の民間団体（NGO・NPO）が行う環境保全活動に資金の助成等を行っています。



イベント情報

地球環境基金は、本年も代々木公園で開催された「エコライフフェア2013」に出展し、多くの方々からエコアイディアをいただきました。秋は日比谷公園で開催されるグローバルフェスタに出展する予定です。

地球環境基金創設20周年!

地球環境基金が創設されて2013年5月に20周年を迎えました。基金創設20年を記念したシンポジウムを11月29日（金）に東京国際フォーラムで開催する予定です。また、これまでの基金事業を総括し成果や実績等を取りまとめた「20周年誌」や「DVD」を現在制作しています。

地球環境基金 20th ANNIVERSARY 1993-2013

編集後記

35号は「環境保全活動に取り組むシニアの方々」を特集しました。緑豊かな地球をより健全な状態で次世代に継承するために、国内外で環境保全活動が行われています。環境に取り組むシニアの方々の豊かな経験と環境への思いをお伝えできれば幸いです。

VEGETABLE OIL INK

独立行政法人 環境再生保全機構

Contents

特集 環境保全活動に取り組むシニア世代

シニアとは何歳以上のことなのでしょう？　明確な定義はありませんが、50～60代以降とするのが一般的なようです。少子高齢化が進む日本では、社会経験が豊富で確かな知識や技術を身につけたこの世代の活躍が期待されています。もちろん、それは環境分野でも同じ。本号では、環境保全活動の担い手として活躍するシニア世代と、まだ活動していない人をどのように巻き込んでいくか等について特集します。

巻頭インタビュー……2
森田正光さん
お天気キャスター、気象予報士

オピニオン……6
シニア世代が最前線で活躍するために
渡辺豊博さん
特定非営利活動法人グラウンドワーク三島 専務理事・事務局長

活動レポート……8
活動のカタチは様々、シニア世代の取組み

Partner's Talk／助成団体レポート……10
特定非営利活動法人野外教育学修センター魚沼伝習館

NGO・NPOサポートプログラム紹介……12
研修講座の活用

地球環境基金のサポーター……14
地球環境基金をご支援くださった方々

表紙写真:NPO法人グラウンドワーク三島提供

【表紙写真】
静岡県三島市「源兵衛川」
家庭からの生活排水やゴミ等で一度は汚れてしまった源兵衛川。しかし、多くの市民による地道な環境保全活動により、現在は「水の都・三島」の清流のシンボルとなっています。環境省の「平成の名水百選」や農林水産省の「疎水百選」にも選定されています。

Interview

お天気から考える温暖化。シニアこそ環境負荷の少ない生き方を!

天気予報の精度が飛躍的に向上したことで、かつては救うことのできなかった命が助かるようになりました。その一方で、異常気象が原因と見られる災害が各地に大きな被害をもたらしています。身近なお天気と地球温暖化との関係、そして温暖化のリスクを回避するために私たちができることについて、気象予報士の森田正光さんにお話を伺いました。

3つの時代からなる予報の歴史 数値予報で飛躍的に進化

天気予報はその昔、「観天望気」と言って、例えば漁師さんが「あの山に雲がかかったから明日は風が強い」と言ったように、自然現象を見て天気を予想する時代が長かったんですね。これを、「俚諺（りげん＝ことわざ）時代」と言います。クリミア戦争中の1854年、黒海で最新鋭の軍艦が嵐で沈没。その原因を調査したパリ天文台長のルベリエは、嵐が地中海から黒海に移動したことを明らかにしました。これを契機に、近代的な気象学が発展していきます。

日本では、明治までが俚諺時代で、明治になり近代的な気象学が入ってきて、とにかく観測しようということになりました。6月1日は気象記念日ですが、これは1875（明治8）年、東京に日本初の気象台が設置され、気象観測が始まったことを記念しています。それ以降、世界中から観測データを集めて天気図にし、予報するという「総観気象の時代」に入ります。

この時代が長く続きますが、1960年代、コンピューターによる天気予報に実用化の目処が立ってきました。70年代に入ると気象庁に数値予報課ができ、77年に気象衛星ひまわりが上がり、80年前後にはアメダスや気象レーダーも整備。集めたデータをコンピューターで計算して予報する「数値予報の時代」に入ります。以降、コンピューターの性能向上とともにものすごい勢いで発展し、予報の精度が格段に上がりました。私は総観時代に教育を受けたので、こういう天気図の場合はこうなるといったことを叩き込まれましたが、このような知識は、こと予報に関して言えば、いらなくなってしまいましたね。70年代くらいまでは、台風で漁船が転覆して何十人という方が亡くなっていましたが、いまの漁師さんたちは天気予報を非常に上手に利用しており、遭難事故は激減しています。そういう意味でも、数値予報の果たした役割は大きいと言えます。

93年に気象予報士制度が発足（95年予報業務の自由化）。この制度も数値予報と関係しています。つまり、コンピューターの予報で当たるのなら、そのデータの読み方の分かる人に気象予報士という資格を与えましょうと。豊富な経験なんていらない、コンピューターの予報をそのまま出せばいい。もちろん、確かな根拠があれば、気象庁と違う予報を出しても構いません。また、予報は「雨」だけれど、こういう状況になったら降らないかもしれないと、外れる可能性も含め、予報を修正していくのも気象予報士の仕事です。

予報と観測は別の業務 観測には人の目が必要

私の敬愛する倉嶋※厚先生いわく、予報官には地下室派と屋上派がいると。地下室派というのは、窓のない地下室で、外を見ずに数値データだけで

予報するタイプ。屋上派は、やっぱり大気の状態を見なければと、屋上に出て予報するタイプ。私は予報については地下室派と決めています。というのも、人間は「晴れ」と予報をしたにも関わらず、外へ出てどんよりとした雲が出ているのを見ると、その瞬間にバイアスがかかり、「曇り」という予報に変更し空をまじまじと見ながらです。いかと言うと、そうではありません。予報とはまったく別の業務、観測が必要だからです。国内では2カ所を除き測候所が無人化されてしまいましたが、これは非常に残念です。空を見て、どの高さにどんな種類の雲が出ていて、それがどのように変化しているかは、人間の目でしか観測できないからです。今外を見ると普通の曇りですが、この雲は高層雲で厚さが3000メートルぐらい。こういったことは、機械では測定できません。データで予報するからこそ、その元となる観測が大事。今観測技術はどんどん失われており、ま

講演会やトークイベントで、気象や防災を分かりやすく解説する森田さん

私は断然、地下室派!

た天気図を描く必要がないので、天気図を上手に描ける人も少なくなっています。

※倉嶋 厚（くらしま・あつし）：気象庁退官後、テレビで気象キャスターとして活躍。

自然はアンバランスが嫌い 異常高温と集中豪雨の関係

最近、異常気象という言葉がよく使われますが、これには決まりがあって「30年に1、2回の頻度で起こる現象」のことを指します。現在、異常気象は20～30年前に比べて3倍起こりやすくなっています。例えばこの3年間、東日本では猛暑が続いていますが、今年も猛暑で4年連続となると統計史上、例がありません。

異常高温と関連して増えているのが集中豪雨。1時間降水量80ミリ以上の集中豪雨の発生回数を見ると、81～90年は平均11・9回でしたが、01～10年には平均16・4回と明らかに増えています。では、異常高温になると、なぜ集中豪雨が増えるのか？　地上の気温が高くなり上空の気温との温度差が大きくなると、自然はアンバランスを嫌うので、温度が高いところと低いところを一緒にして平均化しようとします。その時に集中豪雨が起きる。雨を降らせることで温度の勾配が広がるのを防ごうとするんですね。皆さんは台風を嫌いますが、台風は熱帯の熱を北に運ぶ「熱の輸送機」。台風がなかったら南は人が住めないぐらい暑くなるし、逆に北は寒くて仕方がない。台風で熱の

東日本大震災の被災地・釜石で開催した「お天気キャスター出前授業」の様子

「津波防災の日」をPRするライブイベント

やりとりをしていると考えると、自然はうまくできていると思いますね。

温暖化の最も怖いシナリオ それは生態系の破壊

世界の年平均地上気温は上昇しており、この傾向は80年ぐらいから顕著です。100年後に気温が2～3度上がると、どうなるか？　今、東京の年平均気温が15・9度、鹿児島が18・3度で、その差は2・4度。つまり、100年後には東京が鹿児島の気温になってしまう。東京―鹿児島間の南北距離は約460キロありますから、1年に4・6キロずつ北へ気候帯が移動する計算になります。4・6キロをどれくらいの時間で移動できるかと言うと、人間は1時間9分、ウサギ4分、カメ9時間。カタツムリは750時間かかるけれど、1カ月もあれば移動できます。ところが樹木は、マツ3年、クリ・ブナ5～25年、モミ100～150年と、ものすごくゆっくりでしか変化できません。1年に4・6キロという速度に対応できないので枯れてしまいます。実際に今、高山植物が枯れたり、お花畑がなくなったりしていますよね。木が枯れるということは、その木と共生している昆虫や爬虫類、小さなほ乳類がいなくなるということ。植物が滅びることによって、生態系が壊れてしまうというのが温暖化の最も怖いシナリオなのです。

森田さんが企画した演劇公演の収益金で建てられた
スリランカ・ヒッカドゥアの幼稚園（スマトラ島沖地震の被災者支援）

植物は急激な温度変化についていけない。

シニアが率先したい 環境に負荷をかけない生き方

私たちは幸いにも日本という先進国で暮らしているのですから、環境に負荷をかけない生き方を選択することができるはずです。シェールガスが出て、ここ何百年はエネルギー問題は大丈夫だと言われますが、石油と同じように無節操に使いますか？　私は、そこに歯止めをかけるのが温暖化問題だと思うのです。シェールガスも使えばCO_2が排出されます。思想と言うにはおこがましいけれど、私たちの価値観が問われるのではないでしょうか。例えば「暴力はいけない」とか「ルールを守る」等、私たちが一定の社会規範や価値感を共有しているように、環境問題についても、そういった普遍的な価値観が求められていると思います。

「もったいない」ということをよくご存知のシニアの方にこそ、率先して環境に負荷をかけない生き方を実践し、それを周囲に伝えていただきたい。また、冒頭で総観気象学はもはや役に立たないと言いましたが、役に立つ・立たないは別として、自分が得た知識や経験を次世代に伝えていくこともお願いしたいと思います。私もテレビに出始めで迷っていた頃、先輩から「いったん口に出したことは、理由もなく変えるな」「ひょうひょうとやればいい」等のアドバイスをもらいました。シニアの皆さんの生き方や一言が、後輩の進むべき道を照らしてくれると思います。

森田正光さんの主な活動

■サイエンスショー&出前授業

森田さんが代表を務める株式会社ウェザーマップでは、最も身近な科学の1つである「気象」をテーマに実験やクイズを交えたサイエンスショーや、お天気キャスターが都内の小学校に出向いて行う出前授業（NTTドコモ協賛）を実施している。この出前授業は、2011年6～11月、東日本大震災の被災地である福島県相馬市、岩手県釜石市、宮城県仙台市の小中学校11校でも行われた。

■「津波防災の日」ライブイベント

11年6月、津波対策推進法で11月5日が「津波防災の日」に決まった。この日をPRするために、森田さんが各局のお天気キャスターや気象予報士に呼びかけてイベントを開催。2回目の12年11月5日のイベントでは、「稲村の火」の紙芝居や被災地レポート等を通して、災害から身を守ることについて語り合った。収益金は日本赤十字社に寄付。

特集 環境保全活動に取り組むシニア世代

■生態系を保全する取組み

森田さんは、理事を務める日本生態系協会で手つかずの自然林を残す活動に取り組んでおり、「人が一切立ち入らず、誰も何もしない領域を残すことが最高の贅沢」と語る。

・公益財団法人日本生態系協会
http://www.ecosys.or.jp
・国連生物多様性の10年日本委員会「地球いきもの応援団」
http://undb.jp/committee/team/cheering/

森田正光さんのプロフィール

1950年愛知県生まれ。財団法人日本気象協会を経て、92年初のフリーお天気キャスターとなる。同年、気象予報会社・株式会社ウェザーマップ、2002年に気象予報士受験スクール・株式会社クリアを設立。05年日本生態系協会理事に就任し、10年からは環境省が結成した生物多様性に関する広報組織「地球いきもの応援団」のメンバーとして活動。現在はテレビ・ラジオ出演のほか、全国で講演活動も行っている。

オピニオン

シニア世代が最前線で活躍するために

英国発のグラウンドワーク（環境改善活動）を日本に初めて導入し、市民・NPO・企業・行政のパートナーシップによる地域再生に取り組んできた特定非営利活動法人グラウンドワーク三島。愛称"ジャンボさん"で知られる事務局長の渡辺豊博さんに、シニア世代の環境保全活動についてお話を伺いました。

シニア世代を地域社会を支える主力に

まず、シニア世代について言わせていただくと、「シニア世代＝年金や医療費をもらっている社会のマイナス要因」として語られる場面が多いのですが、それは違うし失礼だと思います。なぜなら、地域が崩壊しようとしている今こそ、シニア世代を地域社会を支える主力に押し上げるべきだと考えるからです。そのためには、シニア世代が自立し自活できる仕組みが必要です。現在、グラウンドワーク三島では環境コミュニティビジネスとして「街中カフェ」を3店運営していますが、1日の売上げは10～12万円で、何人ものシニア世代を雇用しています。地域で生産したものを地域の人が売り、消費する。それ自体は小さな経済かもしれませんが、こういった循環が地域を支え、最終的に若者が地域で生きていける体制づくりにつながります。自然環境も同じで、自然と共生する知恵を持ったシニア世代が地域に残り、それを伝えていけば、棚田や里山を守ることができるでしょう。つまり、シニア世代が活躍できる場をつくることが、地域再生の要となるのです。このことを、最初に言っておきたいですね。

1階は地元の低農薬野菜等を販売し、2階では飲食のできる「街中カフェ」

これからボランティアを始めるシニア世代へのアドバイス

「もっと学びたい」「もう一度、社会の役に立ちたい」。そう思っている真面目なシニアが山のようにいます。そうした方々への私からのアドバイスは2つ。1つは、「オレはボランティアをやるんだ」とか「社会でこういうことをやりたいんだ」といきなり頑張ってしまうのではなく、2～3年、客観的に見る助走期間を持つこと。どこかの団体にちょっとだけ参加してみる。すると、外から見ているのとは違う内情が分かる。それが分かったら、次の団体に行く。いろんな団体の実情を見た上で、自分の立ち位置というか、活動の舞台を決めるのです。第二の人生に入っていくための「学ぶ場」や「経験する機会」が社会制度として整備されていれば良いのですが、今はそれがないので、いろいろな団体に少しずつ参加・体験して自分で見つけていくしかありません。

2つ目は、定年後に活動を始める人は、過去の自分の立場とか肩書きを捨てること。これも経験で分かったことですが、グラウンドワーク三島の場合は、地域を良くしたいという純粋な想いがあり、そのためなら立場なんて関係なく一緒に頑張ろうという意識が強い。そういう場で、「オレは何千人の部下を動かしていた」とか「年収何千万だった」と自慢されると、その瞬間に会話が成立しなくなります。要は、人としてのごく普通のコミュニケーションが必要だということです。

NPOがシニア世代を上手に受け入れるには？

NPOにとって、社会経験やビジネス経験が豊富なシニア世代を受け入れることができれば、大きな戦力になるはずです。ただ、そうするにはNPO自身の資質も問われます。外からのアドバイスを拒む閉鎖性はないか。自分たちの活動に、好奇心旺盛なシニアを満足させるだけのテーマ性やストーリー性、発展性があるか。参加者が達成感を得られるようなゴールが設定されているか。シニアを巻き込むには、人や事業のプロデュース力が必要です。

その他にも、あまりにも専門的になり過ぎていないかチェックする必要があります。そうなると、途中からはなかなか参加しにくいものです。シニア世代を受け入れるためには、こうしたことに配慮すれば良いんじゃないでしょうか。

富士山について一言

富士山が世界文化遺産に登録されることが決まった後のインタビューでした。富士山に70回も登り、1998年からは山頂にバイオトイレを設置する取り組みを進めてきた渡辺さんに、この点についても伺いました。

「信仰の山としての富士山が世界に認められたことは非常に素晴らしいことですが、問題も山積しています。登山者の激増による環境負荷の増加（し尿、ゴミ等）、登山者の安全確保、観光と開発抑止…、イコモスは16年までに解決すべき条件を指摘しています。世界の宝になったからこそ、要求される課題も大きいと言えるでしょう」

三保海岸から望む富士山

Opinion

こんな面白いこと若い人たちには譲れない！

63歳になったばかりで、私もバリバリのシニア世代です。グラウンドワーク三島を始めて21年目に入りますが、始めた時は皆30代後半～40代。事務局長を務める私の周りにコアスタッフが13名。さらにその周りにスタッフ130名とインストラクター300名、そしてボランティアスタッフ500名がおり、この人たちも60～70代が中心です。途中、難しい局面に何度か出くわしましたが、「右手にスコップ、左手に缶ビール」をスローガンに20年も活動してきました。皆の原動力となったのが達成感や充足感で、それがなければ続かなかったでしょう。

設立20周年の際、若い世代への引き継ぎについて大いに議論しました。たどりついた結論が、こんな面白いことは若い人には譲れない！年を取ってお互い自由になる時間が増えたし、社会参加の素晴らしさも実感している。自分の生き甲斐として「死ぬまでやり続ける」と決めました。

もちろん、若い人を拒絶しているのではありません。年間100～150人の大学生に、職場体験やボランティア体験の場として開放していますし、それはこれからも続けていきます。

グラウンドワーク三島が実施してきたプロジェクトの象徴「再生した源兵衛川」

特定非営利活動法人グラウンドワーク三島
専務理事・事務局長
都留文科大学文学部教授 農学博士
渡辺豊博さん

わたなべ・とよひろ
1950年秋田県生まれ。元静岡県庁職員。三島ゆうすい会、財団法人日本グラウンドワーク協会、NPO法人富士山クラブ等の事務局長を歴任。著書に『NPO実践講座』（ぎょうせい・共著）、『富士山学への招待』（春風社）、『共助社会の戦士たち』（静新新書）等多数。

特集

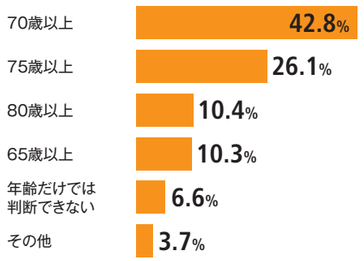
環境保全活動に取り組むシニア世代

データで見るシニア世代の意向

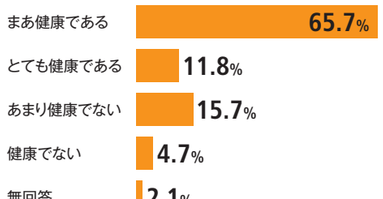
本号では、シニア世代をとり上げましたが、「年齢」や「社会参加」についてどのような意識を持っているのでしょうか？　その傾向を示すものとして、内閣府が実施している「団塊世代の意識に関する調査」（平成24年）から、結果の一部を紹介します。

調査対象：昭和22年から昭和24年に生まれた男女
標本数：6,000人
有効回収数（率）：3,517人（58.6%）

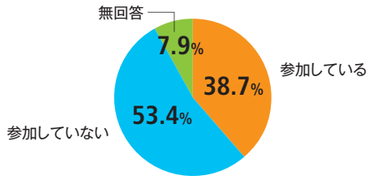
●何歳以上が高齢者か？



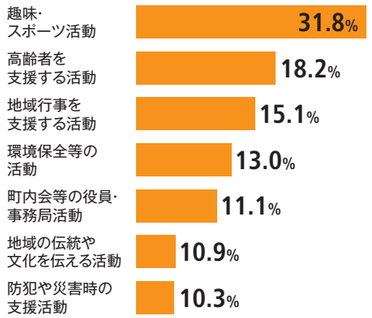
●健康状態



●社会活動への参加状況



●今後、参加したい社会活動（複数回答）



特集 環境保全活動に取り組むシニア世代

活動のカタチは様々、シニア世代の取組み。

環境保全活動に取り組むシニア世代が、今注目されています。
若い時から取り組まれている方もいれば、50~60代になってから始めた方もいます。
今回はそうした皆さんを紹介します。また、珍しいケースとして、
高齢者ボランティアグループをサポートする活動も併せて紹介します。

活動レポート
Action Report

原 強さん

●NPO法人コンシューマーズ京都（京都消団連） 理事長

未来へのバトンを次世代に

蛍光管フォーラム2012in東京 会場の様子

私のNPOは今年設立10年目になりますが、私たちが取り組んだプログラムの一つが「家庭から出るやっかいなごみ」でした。何が「やっかいなごみ」なのかの調査から始め、スプレー缶の出し方へ、そして現在の蛍光管をはじめとする水銀含有製品の適正処理へと活動を展開してきました。

今年10月、国連環境計画の下で準備されてきた「水銀に関する水俣条約」が採択される予定です。この条約を受けた国内の対策づくりに、私たちの活動成果を役立てていただきたいと思います。また私たちの活動も、関係者と協働しながら水銀体温計や水銀血圧計等の回収処理システムづくりへと広げていく必要があるようです。

私のNPOの前身「京都消費者団体連絡協議会」が設立されたのは1972年7月、ちょうど田中内閣が発足した時です。それから40年以上の歳月が流れ、気がつけば私もシニア世代に仲間入りです。シニアというのも悪くないもので、長年の経験からか、様々なことがつながって見え始めたと実感しています。同世代の仲間との話の最後はいつも世代交代の話になりますが、私も「未来へのバトン」をうまく次の世代に渡せるように頑張っていきたいと思っています。無理せず、しかし確実に。

蛍光管の適正処理に取り組む原さん

佐伯昭夫さん

●NPO法人シャンティ山口 事務局長理事

タイ北部の山岳少数民族を支援して20年

現地の子どもたちと一緒に

1987年、福祉関係のイベント会場で一人の青年僧と出会い、ベトナム戦争やラオス内戦の影響でモン族等の少数民族が悲惨な状況になっているという話を聞き、衝撃を受けました。当時、曹洞宗ボランティア会山口県支部のメンバーとしてカンボジア難民の支援活動に関わっていましたが、その活動もいったん終了したので、自分たちのできる範囲でタイの山岳民族を支援しようと、93年にシャンティ山口を立ち上げました。

これまでに多くの仲間や支援してくれる皆さんのおかげで、モン族の子どもたちのために寄宿舎を建てたり、奨学金を支援する等の活動を行うことができました。もちろん、地球環境基金の助成があったからこそできたプロジェクトもあります。今、モン族が多く住むタイ北部地域でエコトイレの設置を進めていますが、これはその象徴的なプロジェクトです。トイレのない地域につくったことは画期的ですし、つくるのも彼らが中心になっています。

最近は1年の8割はタイで生活し、現地の人と一緒に活動していますが、自立支援が目標なので、今後の活動を担う後継者も現地で育てたいと思っています。できれば、元気なうちにプロジェクトの完成を見届けたいですね。

民族バッグを肩にした佐伯さん

レンジャーズプロジェクト

●NPO法人自然環境復元協会

シニアボランティアの良きパートナー

斜面で草刈りをする隊員

「この森を守れなくなるから、木を全部切って芝生にしようと思っているんだ。みんな年をとったし…」。そうつぶやいたのは、自分たちが居住する大規模団地内の緑地を長年にわたり手入れしてきたサンシティグリーンボランティアの代表。相談を受けた自然環境復元協会は、当初は協会スタッフだけで手助けしていましたが、このような要望に本格的に応えようと、ボランティアを必要としているフィールドとボランティアをした人を結び付けるシステム「レンジャーズプロジェクト」を企画。2010年にスタートし、登録隊員799名、出動回数125回、参加人数延べ1323人の活動に発展しました。現在では、東京・横浜等に18カ所のフィールドがあります。

今回は、このプロジェクトが誕生するきっかけとなった大規模団地サンシティでの活動を取材。5月24日午前10時、都営地下鉄三田線志村三丁目駅に集合し、駅から徒歩10分ほどの現地に向かいました。参加したのは高校生、大学生、会社員等の17名。急斜面もある緑地の下草刈りでしたが、参加者の感想は「初めだけど楽しかった。良い汗をかきました」「1年に5回ぐらい参加しています」「時間が空いたので来てみました」と、誰でも気軽に参加できる活動として定着しています。

サンシティグリーンボランティアのメンバーから指示を聞くレンジャーズの隊員
*レンジャーズプロジェクトの詳しい内容は http:///rangersproject.jp

松原和夫さん

●NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会 理事

里海復活にかけるブンさん

砂浜に引き上げられた地引き網をのぞき込む子どもたち

7月16日、新聞紙上に「都内50年ぶり海水浴場復活」という文字が踊りました。この復活を目指し、2001年より葛西海浜公園西なぎさを拠点に活動してきたのが、NPO法人ふるさと東京を考える実行委員会。ご紹介する松原和夫さんは08年に入会し、現在は中心メンバーの一人として活躍する66歳のシニアです。

「きっかけ？ 関口理事長とたまたま知り合いになったことかな…。理事長が『海をきれいにしたい、子どもたちを喜ばせたい』と熱く語るので、だったらお手伝いしようかと」。千葉県浦安で生まれ育った松原さんにとって、東京湾は庭のような存在。すんなりとボランティア活動に入ったそうです。「子どもたちが本当に嬉しそうに遊ぶんですよ。地引き網なんかやるとすごいですよ!」

里海復活に向け、年間を通して様々なイベント等を開催していますが、毎回積極的に参加している松原さんいわく「ぜんぜん苦じゃないね、楽しいですよ。葛西の西なぎさで自由に海水浴ができるようにする、そんな目的がありますから…」

ちなみに、活動仲間は松原さんのことを「ブンさん」と呼んでいます。俳優の菅原文太似だからです。子どもたちの喜ぶ姿を胸に、ブンさんは毎回べか舟を操り沖に出て行きます。

海苔養殖体験の準備をする松原さん。作業に使うべか舟は
松原さん個人所有のもので、毎回大活躍している

Partner's Talk

助成団体レポート

特定非営利活動法人野外教育学修センター魚沼伝習館

魚沼の未来をつくるために子どもを育て自然を守る

越後三山（越後駒ヶ岳、中ノ岳、八海山）をはじめとする名山に囲まれた新潟県魚沼地域。この地で「魚沼の自然の恵みを生きる力に…」をモットーに、「子ども」と「自然」に熱い想いをかけるNPO法人野外教育学修センター魚沼伝習館の活動を紹介します。

お話を伺った坂本恭一理事長（右）と青少年・環境担当の中井杏菜さん

魚沼地域（魚沼市、南魚沼市）を拠点に2002年より活動

■なぜ魚沼で野外教育？

魚沼と言えばコシヒカリが有名なように、ここは自然豊かな地域です。しかし、こうした地域でも生活スタイルはどんどん変わり、子どもたちが野外で遊ぶ習慣はかなり前からなくなっていました。小さな子どもを持つ親にしても、既にそうした経験はほとんどありません。野外活動は、自然の中で遊ぶ面白さと自然の素晴らしさを体験し、自分たちの暮らす魚沼はこんなに良いところだと知ってもらうために始めました。私自身は東京で生まれ育ったのですが、これも何かの縁かなと思っています。

■主な活動内容は？

現在は、青少年育成事業、地域づくり事業、そして昨年から始めた環境事業を3本柱としています。青少年育成事業では、ほぼ毎週末何らかのプログラムを実施。3～6歳児の未就学児から中学生まで、年間5000人の子どもたちを受け入れており、7人の常勤スタッフと20人のサポーターで対応しています。正直言ってかなり大変ですが、「子どもが主人公」という基本は外せないので、毎年、創意工夫の連続です。

青少年の育成には地域の活性化が必須条件

■青少年育成事業と地域づくり事業との関連は？

10年にわたり青少年の育成に関わってきましたが、それだけではダメだと考えるようになりました。地元・魚沼の文化と自然の素晴らしさを子どもたちに伝えても、その子たちが都会に出て行ってしまえば地域はどうなる？我々は、地域の将来の担い手である子どもたちを育てているのではないか？そう考えると、子どもたちが将来安心して暮らせるような地域を同時につくる必要があります。確かに、魚沼のコシヒカリは有名ですが、農業従事者の高齢化が進み、耕作放棄地や休耕田が目立つようになってきました。とても難しい問題ですが、地域資源を活かしながら、地元で若い人の雇用を生むようにしなくてはならないのです。

■地域づくり事業の内容は？

魚沼の地域資源と言えば自然。農林業が中心ですが、ここで起業したい、移住して農業をやりたいという人たちをサポートしています。宿泊できる研修施設もあるし、フォロー体制も整っています。また、昨年からは新しい取組みとして、東京工科大学メディア学部のプロジェクト演習「ソーシャル・イノベーションリーダーズWS」を受け入れています。これは、集落の支援・再生を目指す地域活性化プロジェクトで、学生が農作業等を体験しながら研修を行います。魚沼の将来の可能性を広げる一つのきっかけになればと期待しています。

自然は地域資源 新たに始めた環境事業

■なぜ環境調査なのですか？

豊かな自然も、意識しなければ資源にはなりません。ここでは、自然はごく普通のありふれた日常として見過ごされています。このまま放っておいたら、魚沼の自然だってどんどん悪くなっていきます。今の魚沼をフィールドワークできちんと確かめ、自然を資源として利用していくための道筋をつけることが必要であると考え、新潟大学で植物学を教えていた石沢進先生の指導の下、市民ボランティアにも参加してもらい調査を進めているところです。そして、この調査で分かったこと、例えば魚沼地域に生息する絶滅危惧種等を公表する予定ですが、ギフチョウの生息地については公表を控えたい。というのも、捕獲が禁止されていないので、盗獲が後を絶たないからです。この調査は地球環境基金からも助成を受けており、その成果は平成27年度までに魚沼市の条例づくりに活かされる予定です。

■環境事業の将来は？

若い人たちが頑張ってくれています。だから、なんとかこの魚沼で、環境の仕事で食べていけるような仕組みをつくりたいと考えています。情熱と専門的な知識を持った者が活躍できるフィールドです。人を育てることはできても、そこからの仕組みづくりにはとても時間がかかるので、粘り強く続けていくしかありませんね。

●

子どもたちの野外学習を目的としてスタートした魚沼伝習館。現在は、育てた子どもたちが地元に残れるような社会基盤づくりを目標に、日々ハードな業務に取り組んでいます。

小中学生とその保護者を対象に山林資源を環境教育の場として活用している「うおぬまわくわくキッズ」

環境調査に参加する市民を対象に開催された調査研修会

未就学児（3～6歳）を対象とした森の幼稚園「あいあいくらぶ」

DATA BOX

●名　称：特定非営利活動法人野外教育学修センター魚沼伝習館
●住　所：〒946-0075 新潟県魚沼市吉田138-3
●URL：http://www.uonuma-denshukan.com/
●目　的：青少年育成、地域づくり、そして環境保全活動を通して魚沼地域の活性化を目指す。

●活動実績
2002年　前身団体の「奥只見郷ネイチャーレククラブ」設立
　　新潟県、魚沼市より委託を受け「青少年育成事業」を開始
2004年　文科省より放課後子ども教室推進事業の委託を受け「放課後子ども教室」を開催
2005年　NPO法人格を取得
　　NPO法人野外教育学修センター魚沼伝習館として活動開始
2008年　文科省「青少年体験活動総合プラン」の実施
2009年　文科省「青少年体験活動総合プラン」の実施
　　「魚沼自然体験活動プロジェクト2009」（子どもゆめ基金）の実施
2010年　「魚沼自然体験活動プロジェクト2010」（子どもゆめ基金）の実施
　　「子育て支援者向け研修事業」（子ども未来財団）の実施
2012年　環境調査「地域資源の利活用による自然環境の維持と継続可能な仕組みの形成と構築」（地球環境基金）の実施

●主な活動内容
・自然体験学習　・環境教育学習　・インターンシップ　・就農サポート　・環境調査

地域づくり事業の拠点・福山体験工房（回復させた休耕田での収穫体験）

集落の地元民の仕事を手伝う東京工科大学の学生

Support Program

研修 NGO・NPO サポートプログラム紹介 講座

研修講座の活用

地球環境基金では振興事業の一つとして、環境保全活動に取り組むNGO・NPOを対象に、様々な研修講座を開催しています。今回は、この振興事業のアドバイザーを務める今永正文さんに、地球環境基金の研修講座をどう活用すべきかコメントをいただきました。併せて、海外派遣研修参加者の感想をご紹介します。

■より質の高い研修講座を目指して

今永さんは、地球環境基金が主催している研修講座を第三者の目から見て評価するアドバイザーで、講座の内容や進め方はもちろんのこと、参加者の募集方法等についてまで幅広く検証しています。実際には、どのように検証を行っているのでしょう？　チェックシートの一部を見せていただいたところ、チラシ、集客、会場、スタッフ、講義、実習…と、多岐にわたるチェック項目が並んでいます。しかも、それぞれの項目がさらに細分化されており、例えばチラシでは、アイキャッチがあるか、紙面構成が適切であるか、申込方法が分かりやすいか等11項目。講義では、説得力があるか、具体的な事例が挿入されているか、内容が詰め込みすぎていないか等17項目。このシート等をもとに、講座を実際に見聞きしながら検証するそうです。

「自分でもいろいろなところで講師をさせていただいているので、その経験からも押さえておくべき点は、ある程度体系化できています」

「研修講座というと、講師のキャリアや講義内容に気を取られやすいのですが、対象とする人をどのように集め、参加者に何をどう持ち帰ってもらうか、そこまでトータルに考える必要があります」

■講座を受ける人へのアドバイス

講座を受ける人に対しては、どのようなアドバイスがあるのでしょうか？　3つのポイントを挙げてもらいました。

「第1のポイントはプログラムをチェックすること。プログラムはホームページやチラシで紹介されているので、まずはこれを見て講座の構成や研修の手法をチェック。昔は、講師の話を聞いて、それで納得して帰るパターンが多かったのですが、今はそれだけではなく参加者が主体的に関わることができる講座も増えています。そこのところを確認して欲しいですね」

「第2のポイントはステップアップの場であることを意識すること。活動経験のある方々が受講するわけですから、そこをしっかり意識して参加すれば、研修講座で得られる新しい知識や視点をより実践的なものとして取り入れることができます」

「そして、第3のポイントは参加者同士の交流。研修講座の内容とは直接関係ありませんが、志を同じくする者同士が集まるということは、活動していく上での知恵やノウハウが集まる場であるとも言えます。『こんな時はどうするの』『こんなことやったことありますか』、そういったことをお互いに話し合うことも大切です。研修講座は、交流のきっかけをつくる場としても見逃せません」。そして、「プログラムには、すぐに活動に活かせるものもあれば、将来活かせるものもあります。このことも重要です。目先も大事だけど、3年後5年後のことも考えなくてはなりません。その辺りのバランスをうまくとって受講してください」。基金の研修講座を裏方として支える今永さんならではの言葉です。

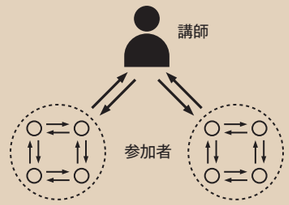
研修・講座 活用のハウツー

- プログラムをチェック!
- ステップアップの場にする!
- 参加者同士の交流の場にする!

今永　正文さん

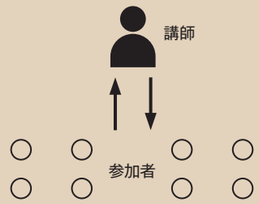
プロセスコンサルタントWARAKU代表、ファシリテーター。プロセスコンサルタントとして様々な分野で活躍するかたわら、自身も環境保全や地域振興の現場で活動しています。お話を伺ったのは、NPO活動や市民活動を行う個人・団体をサポートする施設である静岡市番町市民活動センター。掲示板には様々なチラシ等が貼られていました。

ワークショップ等が組み合わされた場合



参加者がグループに分かれ、テーマに沿って討論。講師とのやり取りもより活発に。

講義だけの場合



参加者は受け身になり疑問点等は最後の質疑応答で解決する。

研修講座 参加者の声

平成24年度の研修講座「海外派遣研修（マレーシア）」に参加された、神村智子さんと斉藤桃子さんのお二人から、研修講座に参加された感想を寄稿していただきました。

PCM（Project Cycle Management）を大学に提案

日本大学 国際関係学部4年
斉藤桃子さん

研修前は、「環境問題」や「生物多様性」は何となく重要だとは分かっていたものの、正直、自分とは少しかけ離れた問題だと思っていました。しかし、研修を通してそこに生息する生物やそこに住む人々、現地で働いているNGO等の取組みを実際に"見る・体験する"ことで、守るべき身近な問題だと感じるようになりました。

研修後は日本の現状を知らないことに気づき、実際に"見る・体験する"ことを心がけるようになりました。ラムサール登録湿地である日光の戦場ヶ原に足を運び、日本とマレーシアの環境教育を比較しながら見ることができました。

また、現地で知ったPCMという当事者の意見を収集するノウハウを大学で行うよう提案をしたところ、即座に採用されました。冨岡丈朗先生とのつながりがあったからこそできたことです。引率してくださった方々や研修生と今でもつながりがあることが刺激になっています。

現地研修地で地元の方と一緒に

何かを変えた10日間

沖縄県立那覇国際高等学校 教諭
神村智子さん

環境保全活動の実態はどうなっていて、環境問題の解決には何が必要なのだろう…。そんなテーマを持ち、参加した海外派遣研修。研修先や村で出会った人たちから様々なことを学びながら、研修員同士で環境保全活動について考えました。高校で教鞭を執っている私にとって、環境教育のための知識や教材を得ただけでなく、たくさんの人たちとの出会いが何かを変えた10日間だったように感じます。

環境保全活動では、環境NGOが専門研究員を置いたり、企業や政府のバックアップを得て、主体的に問題解決に努めていることを知り、この活動にもっと注目すべきだと感じました。

また環境問題の解決には、現状把握や歴史的背景への理解力や行動力が必要であることを再認識しました。

今回の研修で得たネットワークをこれからも活かし、ESD（持続可能な開発のための教育）を行っていきたいと思います。

現地研修地での神村さん（最前列右端）

※平成25年度の研修講座の内容は、10月下旬頃にホームページで告知する予定です。参加ご希望の方は、ぜひご参照ください。

SUPPORTERS

平成25年1月から6月末日現在までに374件、総額**964万2,881円**のご支援をいただきました。ありがとうご　ざいました。

地球環境基金

地球環境基金のサポーター

地球環境基金をご支援くださった方々

地球環境基金に、平成25年1月から6月末までにご寄付・ご支援くださった方々は下記のリストのとおりです。個人や企業・団体としてご協力いただいた方はもちろん、様々なイベントを通じて募金活動にご参加・ご協力いただいた大勢の方々に深く御礼申し上げます。

個人

赤本公孝
アドバンスクラブ
会長 塚本政樹
居澤徳明
石井宏作
石田和久
石田好広
井上雅晴
井上悠子
大木恒和
大坪　誠
岡野香代子
岡野義幸
奥井美由紀
小田龍太郎
片岡知子
カトウフキ
川本哲史
草薙智紀
組谷雅一
栗山俊勝
孝橋絵理子
小林聡子
小林正平
佐藤元基
佐藤弥生
篠原　泰
嶋元　誠
杉本光史
鈴木岳子
鈴木康夫
関上賢治
多賀一平
高戸直子
高野　茜
武井沙織
田坂英樹
田中健三
谷口真砂子
蔦宗寿子
徳田和恵
中嶋純子
中野明子
中山信雄
西久保裕彦
西田洋子
仁科郁子
ネットオフ株式会社
お客様
野田好和
原田広巳
原田利恵
福田昌代
福留　梓
藤原光子
細野つぼみ
牧　美穂
松木優子
真山　壮
圓井　悟
三木憲一
湊　亮策
村田幸恵
山口祥子
横地光子
吉田　実
吉冨　徹
渡部浩幸
渡辺康男

東京ベイ信用金庫 夢定期eco

イトウカズオ
イワサキサトコ
エグチトモコ
オオツカシュンスケ
オオツカユウコ
オオノヨウコ
オカダユウジ
オギヌマアキコ
カナモリノブユキ
クドウノリヒロ
クロカワヒサコ
コイソヨシミ
コサカエツコ
コバヤシヒサコ
サイトウカズユキ
サトウカズユキ
シバツジヒサコ
スズキチヨ
タカハシヨシコ
タケウチタカコ
ナガオヨシコ
ノウダクミコ
ノグチエイコ
ハヤシジュンコ
ハラノブコ
フルヤヒロコ
マツイヨウコ
ヤマモトカツヒコ
ヤマモトハルエ
ヨウメイアキコ
ヨウメイケンジ
ヨネダエミ

企業

アーク引越センター株式会社
株式会社アクアフィナンシャルグループ
株式会社アクセル
浅香工業株式会社
株式会社アゼスタ
イーバートナーズ株式会社
有限会社インターリンク
株式会社エースランドリー
エヌ・ケイ・ケイ株式会社
NDS株式会社
NTTコミュニケーションズ株式会社 プロキュアメント部
株式会社エル・ジェイ
株式会社オークローンマーケティング
荻原物産株式会社
奥野製薬工業株式会社 東京支店
キヨタ株式会社
株式会社クレディセゾン
株式会社ジェイアール 西日本デイリーサービスネット
JNC株式会社
株式会社ジェフグルメカード
株式会社ジャパンクリエイト
SUI INTERNATIONAL 株式会社
株式会社そごう・西武
有限会社第一環境
株式会社橘フィナンシャルグループ
千代田工商株式会社有志
東京ガス株式会社 環境エネルギー館
株式会社トーカイ
トータリゼータエンジニアリング株式会社 園田分室
ネットオフ株式会社
初孫蔵探訪館（東北銘醸株式会社内）
阪急阪神ホールディングス株式会社
株式会社ファミリーマート
株式会社富士通エフサス
株式会社富士通マーケティング
株式会社富士通マーケティング 秋葉原事業所
株式会社富士通マーケティング・エージェント
株式会社富士通マーケティング・オフィスサービス
ブックオフコーポレーション株式会社
ブックサービス株式会社
株式会社プレミアバンク
ポケットカード株式会社
三井住友カード株式会社 東京法人営業部
三菱UFJニコス株式会社
株式会社宮城運輸

国・地方公共団体

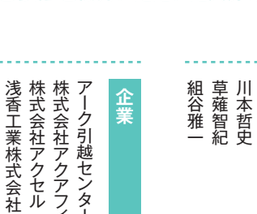
愛西市役所 市民生活部環境課
荒尾市役所 環境保全課
伊勢市役所 環境生活部 環境課
岩見沢市役所 環境部
遠軽町役場
小鹿野町役場
開成町役場
春日部市役所 環境保全課
川崎町役場 町民生活課 環境衛生係
北秋田市役所 森吉庁舎 森吉総合窓口センター
熊取町役場 住民部 環境課 環境課長 島尾 学
佐伯市役所 生活環境課
佐野市役所 市民生活部 クリーン推進課
山陽小野田市役所 市民生活部 環境課
白鷹町役場 町民課
玉川村役場
中津川市役所 生活環境部 環境政策課
ノミシカイケイカンリシャ
播磨町役場 すこやか環境グループ
常陸大宮市役所 市民部環境課
兵庫県庁 農政環境部 環境創造局 自然環境課
益子町役場 環境課
真鶴町役場 町民生活課
水俣市長 宮本勝彬
茂原市役所 市民環境部 環境保全課

その他

NTT全国OB会電友会五ツ橋クラブゴルフサークル
DPI・NGO国連クラシックライブ協会
須賀川商工会議所旅館料飲部会
なりた環境ネットワーク
一般社団法人日本生花通信配達協会
山形美術館募金箱
社会福祉法人ゆあみ会
湯河原町真鶴町衛生組合（湯河原美化センター）
ライフスタイルフォーラム
ラムサールセンター
リサイクル汽車ポッポ
社会福祉法人緑花会
稚内市青少年科学館

（五十音順・敬称略）

＊このリストは、地球環境基金への振込通知書等に記載された名称・氏名に基づき作成しておりますので、個人および企業・団体等の区別につきまして必ずしも正確ではない場合があります。また、紙面の都合により、ご寄付・ご支援くださったすべての方々のお名前を掲載できない場合もございますので、ご了承ください。



寄付者のご紹介

株式会社ジェフグルメカード

株式会社ジェフグルメカードは、全国35,000店の大手外食店で利用できる、全国共通お食事券「ジェフグルメカード」の販売を行っています。本カードは、住宅エコポイントの交換対象商品となっており、売上の一部を地球環境基金へご寄付いただいています。

ポケットカード株式会社

ポケットカード株式会社は、紙の減量化を促進するため、ファミマTカードの利用明細をホームページで確認できる「Web明細」のサービスを提供しています。「Web明細」発行1件につき2円を、地球環境基金にご寄付いただいています。

ご寄付いただいた皆さまに

●お名前をホームページやニュースレター等でご紹介します。
●一定額以上のご寄付をいただいた方には感謝状を贈呈します。

〈 感 謝 状 贈 呈 要 件 〉

ちきゅう　「ほし」が2回以上のご寄付

ほし　法人は50万円以上または累積100万円、
個人は20万円以上または累積50万円以上のご寄付

そら　法人は累積50万円、
個人は累積20万円以上のご寄付

みどり　法人は累積10万円、
個人は累積5万円以上のご寄付

「地球環境基金便り35号」読者アンケートにご協力ください

アンケートは、このページのアンケートはがき、およびホームページ「地球環境基金の情報館」のアンケートページ（http://www.erca.go.jp/jfge/info/publicity/tayori/form.html）において受け付けております。皆様のご意見・ご要望をお聞かせください。

Present

アンケートにお答えいただいた方の中から抽選で10名様に、地球環境基金オリジナル・エコバッグをプレゼント（応募締切：平成26年2月末）。当選者の発表は、地球環境基金のホームページ上で行う予定です。

ご寄付口座のご案内

「地球環境基金」へのご寄付は、下記口座より受け付けております。お振込みの手数料は無料です。

銀行名／支店名	口座番号	口座名称
ゆうちょ銀行	00190-0-664214	地球環境基金
新生銀行／本店	普通預金 0789699	独立行政法人 環境再生保全機構 地球環境基金
三井住友銀行／東京公務部	普通預金 3013615	
三菱東京UFJ 銀行／本店	普通預金 7637448	
みずほ銀行／本店	普通預金 2413416	
りそな銀行／赤坂支店	普通預金 1023850	

同一金融機関でのお振込みについては、取り扱い窓口でお申し出ください。

①独立行政法人環境再生保全機構は、特定公益増進法人に指定されており、税制上の優遇措置を受けることができます。
②ゆうちょ銀行以外の銀行からお振込みいただく場合には、領収書が発行できません。領収書の発行を希望される方は、お手数ですが、地球環境基金部基金管理課（TEL:044-520-9606）へご連絡ください。

※この他にも、クレジットカードを利用したご寄付や、楽天銀行を利用したご寄付が可能です。詳しくはウェブサイトをご覧ください。
地球環境基金の情報館　http://www.erca.go.jp/jfge/